

命を守る志を受け継いで

我が家に飾ってある一枚の顔写真。礼儀を重んじ、几帳面だったという祖父の表情は、とても厳格なイメージです。しかし、私には目もとが誰よりも優しい眼差しに見えます。

祖父は、消防士でした。母が十八歳、祖母が四十一歳の時に癌で旅立ち、四十四年の人生でした。救命救急の勉強をして資格を取り、地域の消防団への指導もしていたそうです。

祖父の存在は我が家にとってとても大きく、母には「人を助けられる人になりなさい」と言い残して逝ったと聞きました。

祖父の志を受けて、母は看護師になりました。そして、父は会社勤めをしながら地域の消防団として大活躍しています。祖父の生き方も影響していたと思いますが、父は何の仕事に就くにしても人とのつながりを重視し、最後まであきらめない勇気を持つことが大事だと話しています。どんなに仕事が大変でも地域に困ったことがあると全力でサポートし、良い解決に向けて仲間とスクラムを組み、先達として活躍しています。その使命感は、とても頼もしく、若い消防団の皆さんに助言し、時には相談に乗って意見を聞き、共に生き抜くための最善策を生み出しています。

東日本大震災の時のことでした。近所の一人暮らしのおばあさんの家が全焼しました。原因は、ロウソクが倒れて火が燃え移って、どうすることもできなかつたのです。父は、すぐ駆けつけ、おばあさんを支えました。家の中にある貯金通帳やバイクの免許証を取る

ために火の中に入ろうとするおばあさんを、必死に抱き止め、「命が大事だ!」と伝え続けました。私は、冷静かつ機敏に消火活動を行う消防団に感動しました。不安と怖さ、悲しさで、言葉にできない涙があふれました。

地域を守るということは、容易なことではありません。強い意志と本心に深い思いやりがあって、苦難に負けぬ行動力が発揮されなければならぬのです。

「山火事があったから帰ってきた!」と、父が急いで戻った時がありました。すぐに消防団の服に着替え、駆け抜けていきました。火の海。この中に父がいると思うとたまらず、「もし、父が燃え盛る炎の中に飲み込まれたらどうしよう。」と、火災の恐怖でいっぱいでした。しかし、日頃の訓練の成果とチームワークを発揮して、父たちは見事に山火事を消したのです。消防士の皆さんは、地域のことを一番よく知っている消防団との協力によって安全に消火しました。父は、顔も服も煤だらけでしたが、私は父を誇りに思いました。

我が家には、「助け合う尊さを心に刻み、自分に厳しく人に優しく生きよ!」という志が受け継がれています。祖父や父は、苦勞をたくさん味わったことでしょう。

でも、大きな生きがいもあつたと思います。私も将来は消防士になり、地域の消防団との連携を大切に、命を守り合える一員になりたいです。

